

## 6. 神話論理

『今日のトーテミズム』は、動植物を祖先とみなす親族集団（トーテム集団）に婚姻規則や食物禁忌が結びついている「トーテム体系」という「未開人」に特有な思考とされるものを、19世紀の人文科学が異文化研究に託してでっち上げた幻想にすぎないとして解体する、いわば『否定的な作業』であった。<sup>1)</sup>と指摘される。

これに対して『野生の思考』の論述は、この「自然と親和的な思考の活動を、ポジティブな形で取り出す事を目的にしている」<sup>2)</sup>とされているように、レヴィ＝ストロースは「野生の思考」を駆使して、神話論理を読み解こうとする訳である。

### ① 神話論理の構成

『神話論理』は四部で構成され、南北アメリカ先住民諸社会の神話を800以上、それらの異伝を含めると1400以上を扱って<sup>3)</sup>おり、神話はそれぞれM1, M124などとナンバーが付され、基準神話M1との関係から分析される。1964年第一巻「生のもものと火にかけたもの」、第二巻「蜜から灰へ」、第三巻「食事作法の起源」、1971年第四巻「裸の人間」で完結する。

第一巻では、自然から文化への移行は料理の起源によって語られ、神話的思考によって選ばれる二項対立は、生のもものと火にかけたもの、新鮮なものと腐ったもの、高いものと低いものなど、感覚的な事象同士の対立、感覚の論理による対立とされる。人間における「食」と「衣」の起源は自然状態から文化状態への移行である神話の手放す事のできない二つの重要なテーマであり、この二つの起源を語る神話の間には相互に変換の関係が推論され（料理と火、水・裸と装身具）検討される。

二巻では感覚の論理による対立から、空っぽのものと詰まったもの、内のももの外のものと言った形態の論理に基づく対立へと移り、火を入れて調理される対象である生の肉となる動物、そして食用の植物の起源を語る神話の変換関係が検討される<sup>4)</sup>。

三巻において基準神話M1であるボロロの「鳥の巣あさり」に関するアマゾン川源流近くに住むトゥクナ族の、狩人モンマネキの神話のなかで、食と衣を確保するための労働、狩猟や農耕(労働)の開始と、死すべき寿命を持つ人間の死の開始が関連付けられ、人間の命の周期性から、女性の生理の周期性、妊娠と出産、季節、月周期、更には天体や宇宙の周期運動も関連付けが分析される。ここでは各項の対立関係ではなく、項と項の関係という次元の異なる広がりから、離れた地域の神話の相互の変換関係が探りだされる。

四巻では、それまでの感覚的、形態的、関係的な対立のすべてを扱いながら、北アメリ

1 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』P185 平凡社新書498 2009年11月

2 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』P185 平凡社新書498 2009年11月

3 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P160 ちくま新書265 筑摩書房2013年9月

4 同上 P189

カ西岸の限定された地域の神話を扱って、ポロロの「鳥の巣あさり」を基準神話とする変換関係が探られ、その驚くほどの近似性が示される。

## ②『神話論理』の読み解き

レヴィ＝ストロースが神話の中に見出す「トーテム的分類の思考」には、「自然種の中の差異関係と人間集団相互の差異関係が類似性による『隠喩』<sup>5)</sup>としての結び付き、またカラスとタカのように意味論的に隣接した、あるいは空間的に隣接した「隣接性による『換喩』<sup>6)</sup>、そして「換喩と隠喩とのあいだの転換ないし反転<sup>7)</sup>」が指摘されている。

『神話論理』の読み解きには、出発点においては、前後の筋書きをばらばらな出来事に解体して「神話素」という単位にわけて、「神話素」相互の関連を考察するという手法、親族の基本構造以来の音韻論における音素とその機能に関連させる手法がめざされ、神話素間での隠喩、換喩、反転などの変換を検討する手法を提示している。

しかし実際には「どこか似ている他の神話や異伝をできるだけ多く集めてグループにして、そのグループの間を考察する<sup>8)</sup>」と言う手法が採られている。この手法も集められた神話グループを、一つの単位として、他のグループとの相互の「関係」を考察すると言う、神話素をめぐる手法、「関係を考察する」という共通する思考方法である。

一、二巻では、MIと番号を付けられた神話（ブラジルのポロロ社会の「鳥の巣あさり」の神話）を基準神話として、基準神話との間でそれぞれの神話はどのような変換関係にあるかを検討し、多様な二項対立（高い／低い、空／地上、太陽／人間）、時間の対立（緩／急、均等な持続／不均等な持続、夜／昼<sup>9)</sup>）について、互いに検討して、どのような変換（隠喩、換喩、反転、中間項の設定、縮約）関係にあるかを検討している。

熱帯アメリカの先住民の生活の中で、蜜とタバコ（煙草の灰）の占める位置は両義的と指摘される。火をかけられない自然の調理である蜜は、濃すぎて毒となり水で薄められる事さえある料理以前の食物であり、これに対して消費されるために火にかけられて灰となると言うパラドックスをもつ煙草であり、この蜜と灰は両義的な意味を抱えて、さまざまな対立関係（二項対立）に変換されるという「関係」が検討されて行く。

だが三巻以降では「ポロロ神話」（基準神話）と呼応する神話が選ばれ、検討される内容が項と項の関係へと広がっていく。たとえばジェ諸民族（南米）の中のアピナイエの諺、「男が産まれるとコンドルが喜ぶ、なぜなら、男は狩りをし、コンドルに死肉を荒野に残して

5 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P131 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

6 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P130 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

7 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P134 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

8 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P163 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

9 レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』 P75 講談社選書 2009年6月

くれるから。他方女の子が産まれるとトカゲが喜ぶ、なぜなら女は炊事をし、トカゲに食べ物のくずを落としてくれるから<sup>10)</sup>を参照する事で、トカゲとコンドルの間には、男／女、火にかけた食べ物／生の食べ物という二対の対立が類推されていると示している。

三巻ではポロロとシェレンテ（ジェ族）という二つの部族の神話は互いに水の起源を語っているながら、その細部にわたって様々な 2 項対立の軸がちりばめられ、それが音、味覚など五感に響く印象となって、様々なアナロジーによって隠喩、換喩、反転されて広がっており、同一民族の神話の変換では意味のわからないままだった神話の細部の意味が、他方の神話の細部と思わぬ形での繋がりが気付かれて、徐々に明らかにされている。

レヴィ＝ストロースは、トゥクナ・インティアンの神話の「しがみつき女」のエピソードの解釈に難渋し、南アメリカの神話学全体からは解明できずに、北アメリカ大陸の先住民の神話へと研究の領域を広げるのだが、そこで「しがみつき女」と「蛙」の等価性を見出した事をうけて、その発想は我々の生きる現代社会でも民衆的な言い回しとして「しつこい」という表現に言い換える事ができるとしている。

そしてさらにこのような観念作用、思考の対象をそれと等値な対象によって置き換えたり、その本質的性質を取り出したりするのは、哲学で言う「還元」の操作と同類のものである<sup>11)</sup>と指摘している。

四巻では、それまでの感覚的、形態的、関係的な対立のすべてを扱いながら、北アメリカ西岸の限定された地域の神話を扱って、ポロロの「鳥の巣あさり」を基準神話とする、感覚的な、そして意味論的な変換関係が探られ、その驚くほどの近似性が示される。

人間はかつて動物達と同じように「自然のさなかに生を亨け<sup>12)</sup>」ながら、やがて火を知り、身を纏い、時の流れを知り、やがて自然の動物種との間に隔たりを抱えつつ生を営む存在となった。隔たりこそが、文化の状態に移行した事によって引き起こされた事態であり、神話は自然の状態にあった従前の眺めとの差異、そのために引き起こされた感興を、多様な動植物種、人間と動植物との係わり、その姿を通して反芻し、その意味合い、いわば解題を記すものと言えよう。

この展開は「音韻論の導きの下に音あるいは声という感性的対象から始まり、味覚等の五感の対象に拡張された『自然から文化への移行を記す形式』は、多様な種によって担われる事で単なる受動的な感覚予見ではなく、生きている生物が能動的に提示する対立と相関

<sup>10)</sup> 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P185 ちくま新書 265 筑摩書房 2013 年 9 月

<sup>11)</sup> レヴィ＝ストロース 中沢新一訳 『パロール・ドネ』 P78 講談社選書 2009 年 6 月

<sup>12)</sup> レヴィ＝ストロース 吉田禎吾 渡辺公三 福田素子 鈴木裕之 真島一郎共訳

『裸の人 II』 P895 みすず書房 2010 年 3 月

の関係として、人間の思考を触発するものとなる<sup>13</sup>。」とされる。

そしてさまざまな二項対立軸は、隠喩、換喩、反転などと広がってゆくのだが、レヴィ＝ストロースはこのような神話の構造を、さながらキリスト教の大聖堂や教会堂の正面を飾る薔薇窓にたとえ、バラ型模様と美しく呼んでいる。小田は「構造分析にとって神話とは、神話と神話の〈あいだ〉にある神話変換にほかならない<sup>14</sup>」としている。

そしてレヴィ＝ストロースは「神話のディスクールはそれ固有の法則に従って展開して行く事を、示す事が出来たと思う。この法則は実例を通してその複雑さを示した論理メカニズムによって、各社会の技術・経済的下部構造にうまく適合している<sup>15</sup>。」とも言う。

後にエリボンとの対話のなかでレヴィ＝ストロースは、4巻の題名「裸の人」について語り、「最初の出発点にもどっているのですよ。『裸のもの』(le nu) は、文化との関係で言えば、自然に対する『生のもの』(le cru) と同等のものですからね。最初の巻(Le cru et le cuit)の最初の語と最後の巻(L'Homme nu)の最後の語はつながっているのです。・・・<sup>16</sup>」としている。

また神話論理を書き進めた当時を回想し次のように言っている。

「ある集団のある神話が、すこしちがった形で近隣の集団にあることが判ったとしますね。そうすると、その近隣の部族に関係した民族学的論文著作を全部読んで、それを取り巻く世界の中で、その技術、その歴史、その社会組織と言ったような、神話の変異に関係するかもしれない要因をすべて調べなければならないのです。私はこれらの部族たちと一緒に、又彼らの神話とともに暮らしていました。まるでおとぎ話の世界に生きているようでした』そして「私の体に神話が沁み込んでいました<sup>17</sup>。」と語り「まるで別世界に生きていたようでした。」とも語っている。

終わりに

渡辺は『神話論理』は、「人間が人間となった条件としての「食」と「衣」の起源を軸として、人間を取り巻くこの世界の森羅万象の起源をめぐる神話的思考を素材として繰り広げられ、最後は火をめぐる天と地の戦いの神話の分析によって閉じられる。<sup>18</sup>」とする。

---

13 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』 P193 平凡社新書 498 2009年11月

14 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』 P189 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

15 レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』 P98 講談社選書 2009年6月

16 レヴィ＝ストロース エリボン 竹内信夫訳 『遠近の回想』 P240 みすず書房 1991年12月

17 レヴィ＝ストロース エリボン 竹内信夫訳 『遠近の回想』 P239 みすず書房 1991年12月

18 渡辺公三 『闘うレヴィ＝ストロース』 P225 平凡社新書 498 2009年11月

そして「なぜ人は火を使うのか、なぜ人は身を装うのか、なぜ人は親族関係のなかで生きるのかと言った人間の固有性を明らかにすると同時に、常に人間を動植物に集約される他の生命形態との共通性と差異において考えている事」を示している。そしてその基底には「自然の多様な生命との共感の感覚が流れている<sup>19</sup>」としている。

人間は自然状態にあつての生物個体としての生命活動の中から、同じ人同士の中に我子／非我子、親族／非親族を見出し、言語によるコミュニケーションを行う文化の状態へと移行したのであろうか。神話とはそのことによって生じた自らを包む自然の中の、従前との異なり、差異、隔たりなどを、時々感興、印象として記すに当たり、自らの命を包み込んでいる自然の動植物の営み、自然現象を媒介にして、記すものといえよう。

自然状態から文化の状態へと移行するひとびとにとっては、自然より他にこの感興を記す手立てはなかったと思われ、神話は、文化状態へ移行したことがもたらした様々な事柄を反芻し、自然の中に生じた懸隔をみずからに納得せしむるための、隠喩、換喩、反転、そして両義的な意味を持つ自然の動植物を媒介にする項を重ねて、懸隔の縮約をはかりつつ、繰り広げられ、展開されている。

そして神話は、しかしながら解消できない自然状態と文化状態という二つの間の懸隔を、隠喩、換喩等の観念作用において、繰り返し繰り返し語っている事が示されたのであった。神話の大地は円いという。

そしてこれら神話のディスクールは、それは他の神話との比較、互いの変換の関係を解き明かすことによって初めて顕かにされ、気付かれたのであった。

---

<sup>19</sup> 渡辺公三編 『文化人類学文献辞典』 P 2 弘文堂 2004年12月